

愛の偏見

タウン・ブックス

ジョゼフィン・カム 小野悦子訳



晶文社



著者について

ジョゼフィン・カム

現代イギリスの女性作家。ロンドンに生れ、十六歳で学校を卒業後、一九二九年結婚するまで秘書として働く。その後作家活動に入り多くの本を出版。そのうち若い人々のための小説や評伝などが二〇冊以上ある。代表作に J・S・ミルについての研究がある。

訳者について

小野悦子(おの・えつこ)

一九三三年東京生まれ。聖心女子大学および同大学院修士課程修了。現在、跡見学園女子大学講師。

訳書―カム「家を出てロンドンへ行く」ブ
ラウン「英国建築物語」(以上晶文社)

ダウンタウン・ブックス

愛あいの偏見へんけん

一九八一年一月一日発行

著者 ジョゼフィン・カム

訳者 小野悦子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

愛の偏見

ジョゼフィン・カム 小野悦子訳

ダウタウン・ブックス



晶文社

Josephine Kamm:
OUT OF STEP
First Published in 1962
by Hodder & Stoughton Ltd., London
Japanese Copyright © 1981
by Shobun-sha Publisher, Tokyo

目次

| | | |
|----|-----------------|-----|
| 1 | 追われてきた青年 | 9 |
| 2 | フィールディング一家の夕べ | 25 |
| 3 | 静寂がもどってから | 42 |
| 4 | リンダの忠告 | 59 |
| 5 | 襲撃 | 81 |
| 6 | お茶もさめて | 109 |
| 7 | ミセス・ライアンのパーティ | 129 |
| 8 | ブライアンが新しいクラブに入る | 159 |
| 9 | ペティとハリイ | 171 |
| 10 | クラブで起きたこと | 194 |
| 11 | 重病人を見舞って | 214 |
| 12 | はたしてうまくいくのだろうか？ | 243 |

訳者あとがき

278

ブックデザイン
平野甲賀

愛の偏見



登場人物

ベティ 主人公。ロンドンに住む 16 歳の少女。

ボブ 南アメリカの英領ギアナから写真の勉強のためにロンドンにきた青年。

ミスター・フィールディング ベティの父。

ミセス・フィールディング ベティの母。

ブライアン ベティの兄。

ミセス・ライアン フィールドイングの家の隣家の主婦。

ティム ミセス・ライアンの息子。

アイリーン ミセス・ライアンの娘。

ミセス・ウィリアムズ ベティの家の近所に住む英領ギアナ出身の婦人。

ルイズ ミセス・ウィリアムズの娘。

エレン ボブの妹。

リンダ ベティの勤める百貨店“ベリッジ”の仕事仲間。

ミス・クック “ベリッジ”の女性支配人。

1 追われてきた青年

ベティ・フィールディングは、そのとき家にたったひとりでいた。そして事件のなにからなまでにぜんぶ見てしまったのだ。自分の寢室の床のつや出しを終って、家具を拭きはじめる前、ほんの数分休んでいるところだった。窓によりかかり身をのりだすようにしている、一人の男が本通りから角をまわってぶらぶら歩いて来るのが見えた。男は通りの名称と家の番号を捜しはじめた。こちらの方へ向かって来たとき、その男は背が高く、やせており、短く刈り込んだ黒い髪をして、^{ゴールドエンブラウ}金茶色の肌であることに彼女は気がついた。彼の身のまわりのすべて、つまり靴から白い絹のシャツ、深紅のネクタイにいたるまで、新品で清潔そうだった。もっている皮のカバンやジッパーつきのズックのバッグも、同様に新しいものだった。

茶色の肌の人たちは、十五、六年前まではロンドンの住宅街では珍しかった。だからベティは、彼がおそらく最近引越してきたウィリアムズという西インド諸島ウエスト・インデリーズ（北米南東部と南米北部との間の諸島。もと英国の植民地で現在独立。英連邦内の

国家連合をな) 出身の家族を捜し回っているのだとすっかり心にきめていた。その家は通りの角を曲つた、ここからは見えないところにある。

男はベティに気がつくとき、見あげて微笑ほほえんだ。「おそれ入りますが、十五番地のミセス・ウィリアムズのお宅を教えてくださいませんか」と彼はたずねた。その声は音楽的で、軽快に歌うような調子があり、学校で知り合っていたウェールズ人の少年を彼女に思ひださせた。

学校は遠い彼方に去ってしまったように思える。卒業したのは十五歳だったが、ベティはいまはもう十六歳なのだ。彼女はやせたのがった顔立ちで、緑がかつた茶色の目、あかがね色ゴッパイレッドでもじやもじやした髪の毛の、小柄で、真面目そうな感じだった。男の質問に答えるのに、まだほとんど口を開かないうちに、角をまわつて大勢の男や少年たちが流れ込んでくるのを彼女は見た。おちよそ二十人くらいだったが、その様子からベティは、彼らが本通りの向う側にある汚らしいごちやごちやした地区からやってきては、騒ぎを求めて街角をぶらぶらして時間をつぶしている連中だとわかつた。

「黒んぼのモンキーはあそこだ！」と彼らの一人は大声で叫んだ。

ベティは彼が「テッド(与太者)」の一人だとわかつた。夏の夕べはまだ暑かつたが、彼は筒ドレイン型のズボンの上にベルベットのふちどりをしたフロックコートを着ていた。

「ジャングルに帰れ！」と別の「テッド」がわめいた。そして石を拾おうとかがんだ。

茶色の肌をした男はまだ尋ねたそうにベティを見あげていた。彼は明らかに、どなり声が自分

のことを指しているのだとは理解していなかった。

しかしその少女にはわかりすぎるくらいわかっていた。この前の二、三日の間にも本通りの向うの地区の与太者仲間が、夕方仕事から家路にむかっていた有色人種カライド・メンや、だれにも害を与えたりせずに歩いてきた有色人種カライド・メンを襲っていたのを知っていた。ペティはこのことをわかっていたので男は知らなかった。だから、彼が追っかけてくる連中の方を振り向いたとき、恐怖も怒りも示さずに、ただ不思議そうにしている様子を彼女は見たわけだ。

そのとき、彼女は言った。「走って！」彼女は下にいる彼に向って叫んだ。「走って！」それから彼女は、ここからはカーブになっていて見えないウィリアムズ一家が住んでいる家を指した。男が身の危険を感じたのは、連中が近づく寸前だった。彼がきびすを返して走り出そうとしたとき、隣家の玄関のドアが開いた。そしてその家の持主であるミセス・ライアンという未亡人が現われた。

ミセス・ライアンは大柄で、どっしりとした感じの人で、十歳から二十歳にわたる年齢の六人の子持ちだった。洗濯桶からたたいたま腕を出したばかりというように、彼女の袖はいつもたくしあげられていたし、髪の毛に金属製のカーラーの列がついてない彼女を見たことのある人は未だかつていない。彼女はほがらかで、人づきあいのよい人だった。そして彼女はいま通りで起りかけているすべてのこと——ペティの母親のミセス・フィトルディングは、この風潮を強く非難していたのだが——を知っていた。

「ここにお入んなさい、ねえ」ミセス・ライアンは呼んでいた。ペティは彼女が男の腕をつかんで家の中に引きずり込むのを見た。それからドアがぱたんと締まるのを聞いた。彼女がそうすると、群衆はこの家めがけて突進してきた。ベルベットのふちどりのあるフロックコートを着たあの「テッド」はノッカーをばんばんたたきつけた。「よう、おばさん、そいつを出しなよ」と彼はいやなしわがれ声で言った。「もしあんたがよお、あんたに何がためになるかわかっているならよ、やつめんどうはおれらにまかせるだろうな」

ペティはドアがぎいっと一インチほど開いてチェーンのがチャガチャいう音を聞いた。「そうね、あんたも自分にとって何がためになるかわかっているのなら、こんなところにはいないで自分のことでもかまったりやいいのよ」ミセス・ライアンはどなった。

二人の「テッド」は近づいて、玄関のドアを蹴り始めた。

「ペンキがはげるから気をつけてよ！」とミセス・ライアンは言った。

「ペンキがはげるから気をつけてよ！」と鼻のつぶれた年長の男がやじった。「もしあんたがやつをほうり出さないならよ、気をつけなきゃならないのはペンキどころじゃないぜ」

連中は行動に出た。一階の窓に石を投げつけ、いくつかの窓ガラスは粉々に砕けた。

「もう一度そんな音を出したら、お巡りさんをお呼びからね」とミセス・ライアンは言った。

「あんたがかくまっている黒い奴とのが終りゃよお、警察でも消防隊でも呼べばいいさ」と、つぶれた鼻の男はどなった。

ベティは彼が胸のポケットに手をすべり込ませたのを見た。そして彼が手をそこから抜いたとき、彼女は日の光の中でキラリと光った刃物を見たような気がした。

「彼がどんな悪いことをあなたにしたっていうの、あたしは知りたいわ」ミセス・ライアンは訊いていた。「あなたは今日まで彼のこと一度も見たこともないんでしょ。絶対間違いないわ」

「おっしゃる通りさ、おれたちやあ見たことなんてねえさ」あのフロックコートを着た「テッド」が答えた。「おれたちがやりたいことはよ、やつを他の猿たちと一緒にジャングルに送り返すことなのさ」

「じゃあ、あんたたちは人間だっていうの？」と彼女は迫った。「あんたたちは無知な卑怯者以外の何ものでもないじゃないの」

彼女の声には軽蔑の念が満ちみちていた。ベティの顔は恥ずかしさで熱くなった。彼女がミセス・ライアンを助けるために何かできることがあるに違いない。だがどうやって？ 彼女はだれか他の人が見えていないかどうか、通りの向う側をちらっと見た。反対側の家々の窓には二、三人の頭が見えていた。そしてその人たちはまるで映画でも見ているように、その目をじっと通りに向けていた。

またガチャンという音がして、何かがミセス・ライアンの玄関のドアにぶつかった。

「あたしめがけてレンガを投げつける勇氣なんかないでしょ。あんたたちはだめな連中の集まりですものね」と彼女は大胆にどなった。

彼女の声は大きくはつきりとしていた。しかしベティにはミセス・ライアンが不安な気持ちになりだしていることがわかった。彼女はおそらく警官を呼びに行ってくれる人があらわれるまで連中を何とかくい止めておけたらと思っているのだろう。突然、少女は自分が警官を呼びに行かなければ、他にだれも行く人はないだろうということに気がついた。彼女はあつというまに階下に降りて行った。しかし危険が待ちかまえている玄関のドアから出て行かずに裏口から出た。

通りに沿っている家々には小さな前庭と裏庭があり、低い塀で隣り同士区切られていた。ベティは、ときどきミセス・ライアンの末娘でセルフ・サービスのストアで働いているアイリーンとおしゃべりをするため、ミセス・ライアンの家の庭に塀を登って入っていたことがある。彼女はいまも塀をよじのぼって越えた。幸いなことに彼女はジーンズとかかとの平らな靴をはいていた。通りの曲り角にある狭い通路に行くまでに、たった六つか七つの裏庭を越えればよかった。そしてその通路のちやうど向うに電話ボックスがあるのだ。通りに面した窓から眺めたりしていた。だから外出していたり、通りで起っている光景をおもてに面した窓から眺めたりしていた。だからベティはだれにも見られずに通路の安全な地点に着いた。片方の手は、ぐらぐらしていたレンガで負ったすり傷でひりひり痛んだが、すり傷や額にある一筋の泥を別にすれば彼女はまったく異常なかった。

だが、彼女の心臓はどきんどきんと音をたてており、指は999のダイアルを回しているとき震えていた。彼女は自分のことではなしに、ミセス・ライアンとそのかくまっている茶色の肌の

男のことでおびえていた。そしてまた彼女は男たちや若者たち——つまり自分と同じロンドンの人たちが——が、ミセス・ライアンの家の外にいる連中がやっているのと同じように振舞うだろうということを感じて胸が悪くなった。

ほんの数秒でベティは警官に用件を説明し、住所を告げて電話を切った。それから彼女は来たときのやり方でもどって、事のなりゆきを見るため二階の自分の部屋にさがっていった。

はじめのうちは何も変わったことはなかった。男たちはよじ登って壊れた窓から入ることはたやすいことだったが、まだそうしようとしたものはいなかった。その代りに彼らはごちゃごちゃとかたまって立っていた。一方ミセス・ライアンは彼らを激しく非難し続けていた。「あんたたちみんなは罪のない人たちを追いかけているのよ」と彼女は言っていた。

「黒んぼたちに罪がないって？」つぶれた鼻の男は嘲笑いながら言った。「あいつらはおれたちの家だとかよお、いい仕事だとかをよお、奪ったりするんだぜ。そして次にはおれたちの女の子を追いかけるんだ」

「あの人たちはここに住む権利があるのよ、あたしたちと同じようにね」とミセス・ライアンは言った。「彼らにはあんたたちにはできない仕事をとるだけよ。つまり、たとえあんたたちのだれかが、なにか仕事をするといっても、あたしはそんなこととも信じられないってことよ。女の子のことにしたって——そうねえ、たとえあんたたちが自分たちの女の子を見つけられないなら、それはあんたたちのせい、あの人たちのせいじゃないわ」